

小祢宜(こねぎ)の復活

小祢宜装束(狩衣2領と袴2腰)と神楽鈴2本の新調



神職の浅黄袴(見本)



現存する神楽鈴

小祢宜という役は現在はなく、明治、大正頃の祭礼記録に其の名がみえる。何時頃なくなってしまったのか定かではないが、現存する装束や神楽鈴から戦前ぐらいまでは役が存在したのではないかと推測する。明治の祭礼記録には御旅所と吉田神社へ還幸した際に神楽を奏したと記載がある。

小祢宜は2人と記録があり、狩衣2領と神楽鈴1本が現存する事から、狩衣2領と袴2腰、神楽鈴2本を新調して小祢宜を復活させる。

鼻高面の狩衣同様、半世紀以上使用されずに保管されていた為、生地の状態が悪く、継続的な使用には堪えられないとの指摘を受け、修理を断念、新調する事とする。

生地については全く同じものは費用的にも難しく、鼻高面の狩衣同様、新大和錦を採用し、色は緑色を継承して新調する。

袴は廃棄されたようで、残っていない為、神職の服制を参考に浅黄の切袴2腰を化繊で新調する。

神楽鈴は現存1本であり、傷みも激しく使用できる状態ではない事から、2本揃いの鈴を新調する。

小祢宜とあるが、神職の子弟に限ったものではなく、氏子町内の子供が役を務めていたようである。

小祢宜も長きにわたり不在である事から、狩衣と袴は小学3～6年生の身長に合わせて新調する

毎年小学3～6年生を2名募集する